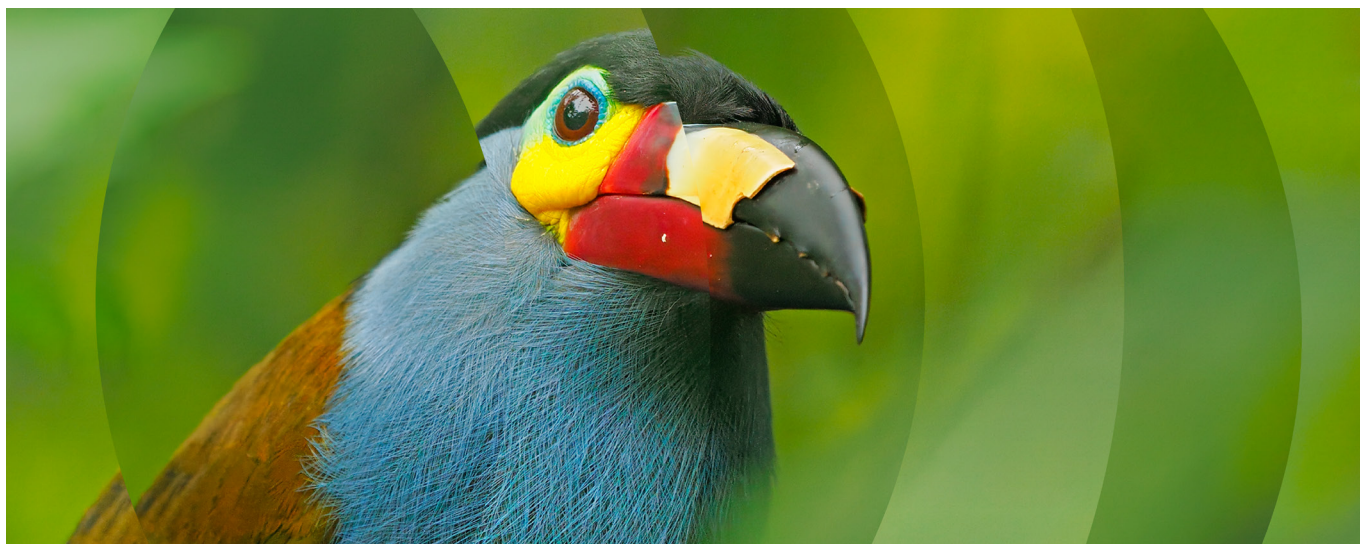


種と生態系のための堅固な目標設定と、迅速で検証可能なアクションの実施に向けたIUCNのアプローチ



要約(エグゼクティブ・サマリー)

ビジョンと野心

「ネイチャー・ポジティブ（Nature Positive）」とは、2030年までに自然を測定可能な形で回復軌道に乗せることを意味します。この概念は、昆明・モンテリオール生物多様性枠組（KMGBF）に基づき、より良い自然環境の状態を実現することで、人々の健康、地球の持続可能性、そして経済の健全な発展を支える未来の社会を目指しています。

IUCN RHINO（Rapid High-Integrity Nature-positive Outcomes：迅速かつ信頼性の高いネイチャー・ポジティブの成果）は、特に民間セクターにおける喫緊の課題である測定可能で信頼性の高い生物多様性への貢献を支援するため、2023年11月から2024年3月にかけて実施された幅広いコンサルテーションを経て開発されました。このIUCN RHINOアプローチは、企業、金融機関、政府、市民社会がKMGBF、および国連持続可能な開発目標（SDGs）に貢献するための、科学

的根拠に基づく実践的な道筋を提供するものです。

IUCN RHINOは「科学に基づいた迅速かつ確かなアクションを通じて、自然の損失を反転させる世界」の実現を目指しています。本アプローチは、種の絶滅リスクや生態系の崩壊を減らすための取り組みに焦点を当てることにより、迅速かつ検証可能な形で生物多様性目標への貢献を可能にします。IUCN RHINOは、ネイチャー・ポジティブ・イニシアティブ（Nature Positive Initiative）、自然関連財務情報開示タスクフォース（TNFD）、科学的根拠に基づく目標ネットワーク（SBTN）などの国際的な枠組とも整合しています。

「ネイチャー・ポジティブ」は、自然の価値を社会のシステムや制度に組み込み、世界経済を変革することで、2050年までに自然の損失を反転させることを目指しています。これを実現するには、政府、企業、地域コミュニティ、先住民、そして市民社会が協働して取り組むことが不可欠です。

IUCN RHINOの高信頼性の原則と スコープ

IUCN RHINOでは、ネイチャー・ポジティブ・イニシアティブが掲げる「**2020年を基準に、2030年までに自然の損失を食い止めて反転させ、2050年までに完全な回復を実現する**」という定義を採用しています。

本アプローチでは、この目標の達成に貢献するため、ネイチャー・ポジティブに関連する目標やターゲットを掲げる企業が10の基本原則（影響の回避・緩和、生物多様性の主流化、地域やセクター横断的な協働、透明性と公平性の確保、グローバル目標との整合など）に基づいて行動することを推奨しています。

IUCN RHINOは、地域レベルからシステム全体に至るまでのアクションの整合性を担保するため、科学的な信頼性、社会的な公平性（先住民と地域社会（IPLC）の尊重、自由意思による事前かつ十分な情報に基づく同意（FPIC）の徹底）、および透明性を重視しています。また、IUCNが策定する各種スタンダードを反映するとともに、国際的な政策枠組との整合性も組み込んでいます。

IUCN RHINOは万能の解決策ではありませんが、企業が科学的根拠に基づき、「悔いのない（no-regrets）」アクションを実践するための実用的な方法論を提供しています。本アプローチは、以下の3つのインパクト・トラックで構成されています。

1. **直接的インパクト（Direct Impact）**：陸域や沿岸・海域の利用・管理に関わる企業向け
2. **バリューチェーン・インパクト（Value Chain Impact）**：生物多様性に影響を与える資材や製品を調達する企業向け
3. **投資家インパクト（Investor Impact）**：ポートフォリオを通じて生物多様性に影響を及ぼす金融機関向け

現行版のRHINOでは、まず直接的インパクト・トラックに重点を置いています。バリューチェーン・インパクトおよび投資家インパクトのトラックについては、今後さらなる開発が予定されています。

測定の枠組

IUCN RHINOアプローチの中核を成す指標が、STAR（Species Threat Abatement and Restoration：種の脅威の軽減と回復の指標）です。STARはIUCN絶滅危惧種レッドリスト™のデータを用いた指標であり、種の絶滅リスク軽減を以下の指標によって定量的に評価します。

- STAR_T：脅威の軽減（Threat abatement）
- STAR_R：回復（Restoration）

STARは空間的に明確で、スケール（規模）の拡大が可能であり、複数の地域、ポートフォリオ、管轄区域の集約にも対応しています。同指標は次のような用途に活用することができます：機会の評価（estimated STAR・推定STAR）、ベースラインの算定と優先行動の特定（calibrated STAR・校正STAR）、目標の設定（target STAR・目標STAR）、実際の行動が種の脅威軽減にどの程度寄与したかの評価（realised STAR・実現STAR）。

なお生態系レベルの測定指標については、現在、生態系レッドリスト（Red List of Ecosystems：RLE）や、その他のグローバルな生態系分類法を用いた開発が進められています。



実践のステップ

IUCN RHINOの実践ステップはTNFDのLEAPフレームワークに整合しており、ユーザーを次のプロセスに沿って導きます。

- **Locate**（発見）：センシティブな地域やステークホルダーの特定（推定STAR）
- **Evaluate**（診断）：種や脅威の確認、ベースラインの定義（校正STAR）
- **Assess**（評価）：優先的に対応すべき脅威の特定、ステークホルダーの参画、ベースラインの精緻化
- **Prepare**（準備）：アクションプランの策定、ターゲットの設定（目標STAR）

さらにIUCN RHINOでは、LEAPに加えて以下の2つのフェーズを提案しています。

- **Implement**（実施）：脅威低減のためのアクション実行、モニタリング
- **Report**（報告）：生物多様性への貢献の定量化、開示（実現STAR）



適用事例（ケーススタディ）

IUCN RHINOは、ブラジルにおける鉱業セクターのAnglo American社や林業セクターのSuzano社、さらにコーヒー調達に関する事業などに試行的に適用されてきました。これらの事例では、企業がKMGBFと整合した形で生物多様性を管理・保全する上で本アプローチが有効に機能することが示されています。現在もさらに多くのパイロット事業が進行中であり、今後これらの試行から得られる知見の拡大が期待されています。

また、インド、コスタリカ、コロンビアの事例では、IUCN RHINOアプローチが国や地方の政府機関による自然に影響を与える意思決定においても有効な手法であることが確認されています。加えて、成果の実現に重要な役割を担う市民社会組織にとっても本アプローチが有用であることが明らかになっています。

終わりに

IUCN RHINOアプローチのうち、特に生態系レベルの測定指標やバリューチェーン・投資家向けのインパクト・トラックについては、今後さらなる開発と試行が求められています。一方でIUCN RHINOは、陸域や沿岸・海域の利用・管理に関わる企業や組織が、グローバルな生物多様性目標に対して有意義な貢献を行うための直接的インパクト・トラックを、すぐに活用できる高い整合性を備えた方法論として提供しています。

IUCN RHINOは、科学的な厳密性、ステークホルダーの参画、政策との整合性の確保を通じて、企業や組織によるネイチャー・ポジティブの取り組みが測定可能で正当性を持ち、実際にインパクトを生み出すものとなるように、その実現を支援していきます。

詳しい情報・お問い合わせはこちらへ

www.iucnrhino.org
rhino@iucn.org

